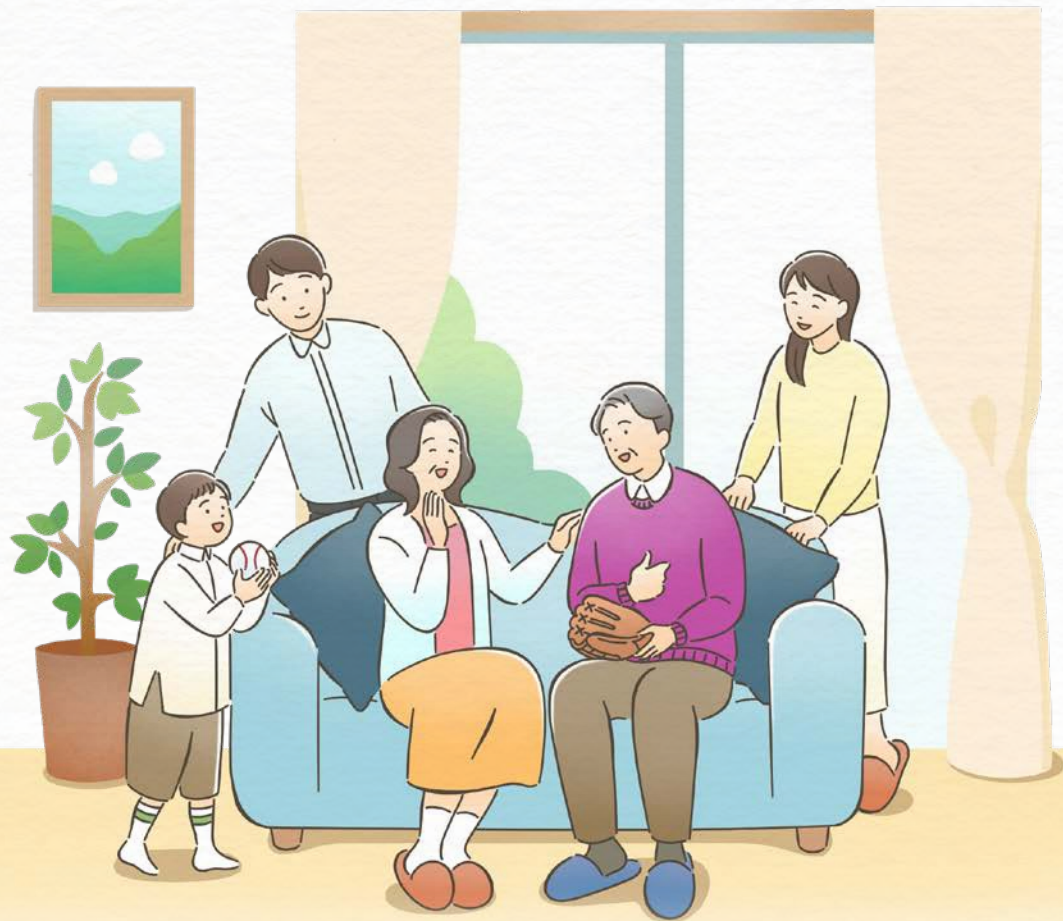


# 胃がんの薬物療法を受ける患者さんとそのご家族へ

監修 大阪大学医学部附属病院 がんゲノム医療センター副センター長 准教授  
佐藤 太郎 先生



## 緊急時の連絡先

医療機関名

診療科名

担当医師名

電話番号

診察券番号

アステラス製薬株式会社

監修者の所属・役職は2023年12月時点の情報です

(2023年12月作成) EMC-NK

VLY21001A01





## はじめに

この冊子では、胃がんの薬物療法を受ける患者さんとそのご家族を対象に、胃がんの診断・治療の流れや治療中の生活について解説しています。

胃がんとは何か、どのような検査をするのか、どのように治療方針を決めていくのか、治療中の生活で気をつけることなどをまとめています。

胃がんと診断され、戸惑いや不安もあるかもしれませんが、ご自身の病気について理解を深め、治療に取り組む助けとしてご活用ください。

わからないことや、もっと詳しく知りたいことなどがありましたら、担当医や看護師にご相談ください。



## 目次

はじめに	2
胃がんについて	4
胃がんとは	4
胃がんの症状	5
胃がんの検査と治療方針決定までの流れ	6
胃がんの進行度	8
胃がんの進行度分類	10
胃がんの治療	12
胃がんの治療選択(アルゴリズム)	12
薬物療法とは	14
薬物療法を選ぶときの主な指標	15
薬物療法に用いられるお薬の特徴と主な副作用	20
治療中・治療後の生活	26
通院と検査	26
食事	27
生活	27
治療中の仕事について	28
再発したときの治療	28
ご家族の方へのお願い	29
胃がんや治療についての相談	30
心の専門家	30
高額療養費制度について	30
がん情報サービス	31

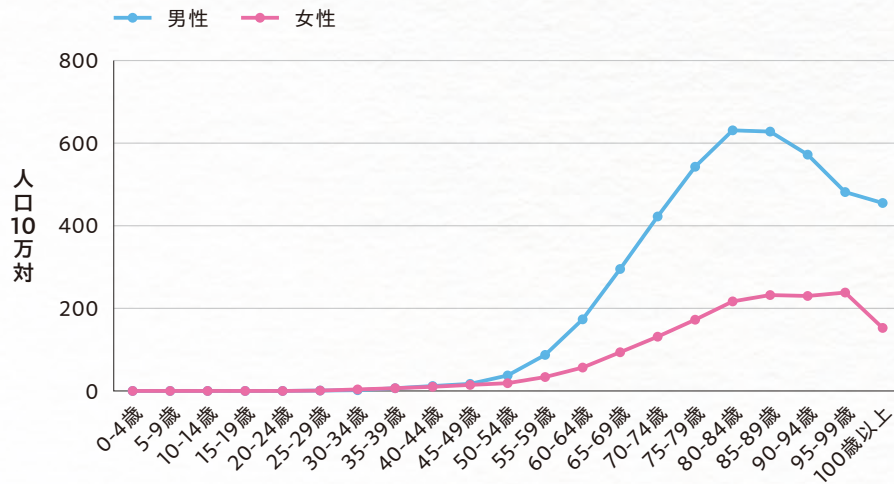


# 胃がんについて

## 胃がんとは

- 胃に生じる悪性の腫瘍を、胃がんといいます。胃がんは、胃の壁の内側をおおう粘膜の細胞が何らかの原因でがん細胞となり、増えていくことにより発生します。
- 胃がんは、日本で多くみられるがんの1つです。50歳前後から、特に男性で罹患率が高くなります。

胃がんの罹患率（年齢階級別、2019年）



国立がん研究センターがん情報サービス「がん統計」(全国がん登録)  
([https://ganjoho.jp/reg\\_stat/statistics/data/dl/index.html](https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/data/dl/index.html) (2023年12月閲覧)) を参考に作成

## 胃がんの症状

- 胃がんは、早期の段階では自覚症状がほとんどなく、進行した場合でもあまり症状がみられないこともあります。
- 胃がんでは、がんに伴う炎症や潰瘍の症状があらわれます。代表的な症状は、胃の痛みや不快感、胸やけなどです。進行した胃がんでは、がんからの出血が続き、ふらつきやめまい、動悸などの貧血症状や黒い便(タール便)が出ることもあります。



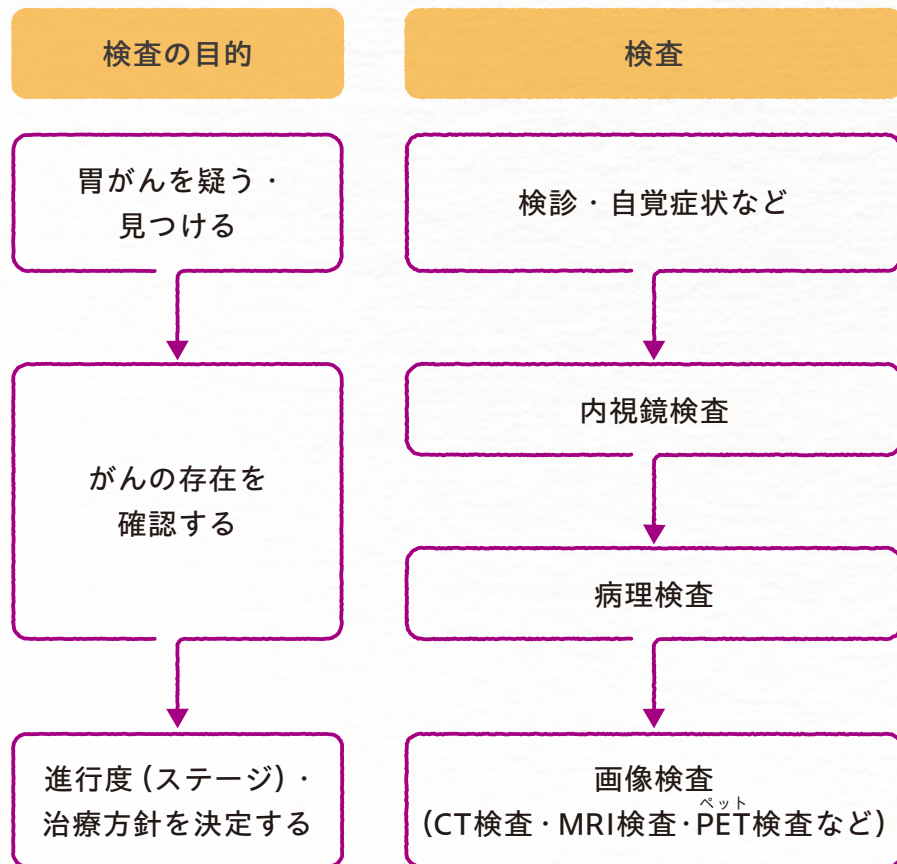
※これらは胃がん以外の疾患でも生じる症状であり、このような症状があらわれても、必ずしも胃がんであるとは限りません。



# 胃がんについて

## 胃がんの検査と治療方針決定までの流れ

- 胃がんが疑われた場合には、まず、「がんの存在を確認するための検査」を行います。
- がんの存在が認められた場合には、治療方針を決めるために、「がんの進行度(ステージ)を診断する検査」を行います。



## 内視鏡検査

カメラを内蔵した細い管を口や鼻から入れ、食道や胃の内部を観察する検査です。病変の有無、病変が存在する場合はその部位、広がり、深さなどを知ることができます。病変部の組織を採取することもあります。



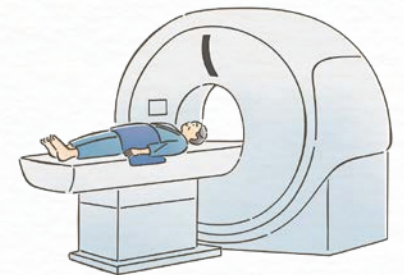
## 病理検査

内視鏡検査や手術の際に組織の一部を採取し、細胞の形や並びなどを顕微鏡で調べる検査(生検)です。がん細胞の存在を調べることができます。



## 画像検査 (CT検査、MRI検査、PET検査)

X線や磁気などを用いて体内の様子を画像にする検査です。がんの深さや、他の臓器への転移があるかどうかを調べることができます。





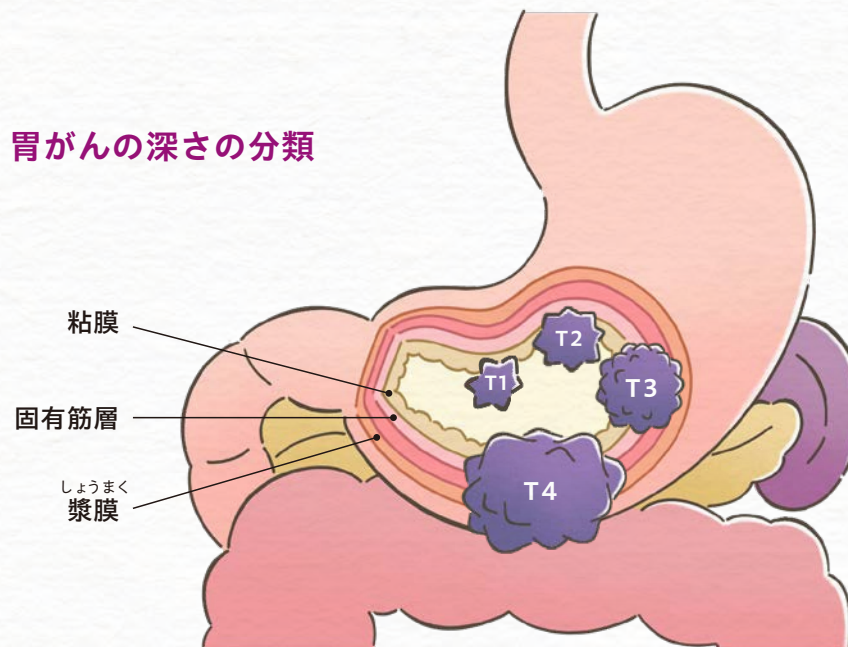
# 胃がんについて

## 胃がんの進行度

### 深達度

- 胃がんは胃の表面の粘膜で発生し、深くまで進んでいきます。浅いところにとどまっているものを早期胃がん(T1)、深くまで達しているものを進行胃がん(T2~T4)といいます。
- 胃がんの進行度は、がんの深さ(深達度)を表すT分類のほか、リンパ節転移の程度を表すN分類、遠隔転移の有無を表すM分類を総合して決定されます。

### ● 胃がんの深さの分類



粘膜(粘膜と粘膜下組織)にとどまっているがん



粘膜下組織を越えるが固有筋層にとどまるがん



固有筋層を越えるが漿膜下組織にとどまるがん



胃の外側に出ているかあるいは他の内臓や組織に浸潤しているがん

# 胃がんについて

## 胃がんの進行度分類

- 胃がんの進行度はステージⅠ～Ⅳに分類されます。遠隔転移がある場合は、T・N分類にかかわらずステージⅣとなります。
- 進行度分類には、治療方針を決定する際に画像検査などにより判断する「臨床分類」と、内視鏡切除や手術の際に採取した病変の病理検査により判断する「病理分類」があります。

## ● 胃がんの臨床分類

遠隔転移	なし(M0)		あり(M1)
リンパ節転移	なし(N0)	あり(N+)	有無にかかわらず
深達度			
T1a/T1b, T2	Ⅰ	ⅡA	ⅣB
T3, T4a	ⅡB	Ⅲ	
T4b	ⅣA		

※ 頭に「臨床的」(clinical)の略語であるcをつける(例:cステージⅠなど)

## ● 胃がんの病理分類

遠隔転移	なし(M0)					あり(M1)
リンパ節転移の個数	なし(N0)	1~2個(N1)	3~6個(N2)	7~15個(N3a)	16個以上(N3b)	有無にかかわらず
深達度						
T1a/T1b	ⅠA	ⅠB	ⅡA	ⅡB	ⅢB	Ⅳ
T2	ⅠB	ⅡA	ⅡB	ⅢA	ⅢB	
T3	ⅡA	ⅡB	ⅢA	ⅢB	ⅢC	
T4a	ⅡB	ⅢA	ⅢA	ⅢB	ⅢC	
T4b	ⅢA	ⅢB	ⅢB	ⅢC	ⅢC	

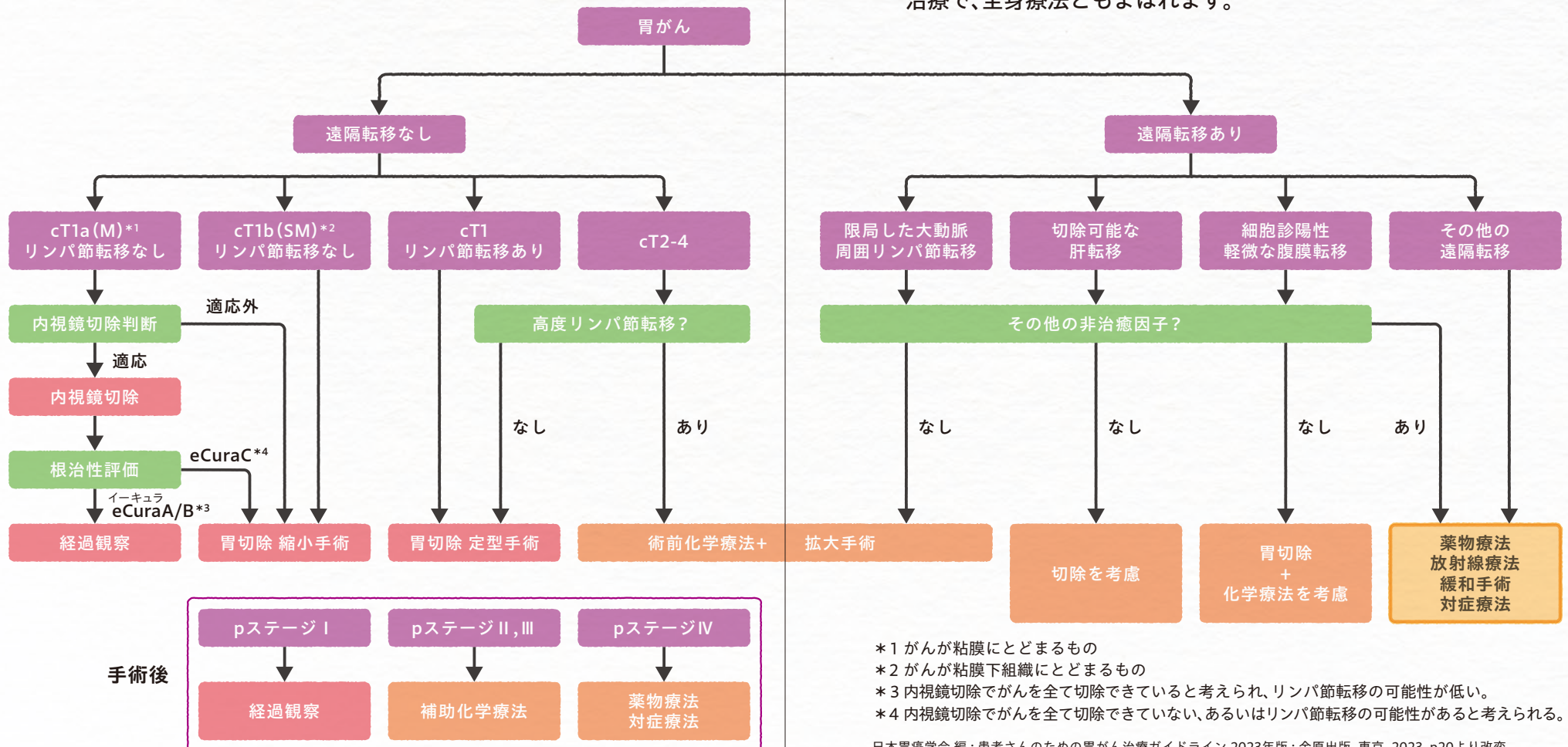
※ 頭に「病理学的」(pathological)の略語であるpをつける(例:pステージⅠなど)



# 胃がんの治療

## 胃がんの治療選択(アルゴリズム)

- 胃がんの一般的な治療アルゴリズムを下記に示します。治療方針は、治療アルゴリズムのほか、患者さんご本人の希望や生活環境、年齢、体の状態などを総合的に検討し、担当医と話し合って決定します。



- ステージⅠ～Ⅲでは主に内視鏡切除や手術によってがんを取り除きます。がんを小さくさせる、再発を防ぐといった目的で手術前後に補助的に薬物療法(化学療法)を行うこともあります。
- ステージⅣでも手術を行うことがありますが、ステージⅣや再発の際には、薬物療法が中心となります。薬物療法は全身を対象とした治療で、全身療法ともよばれます。

\*1 がんが粘膜にとどまるもの  
 \*2 がんが粘膜下組織にとどまるもの  
 \*3 内視鏡切除でがんを全て切除できていると考えられ、リンパ節転移の可能性が低い。  
 \*4 内視鏡切除でがんを全て切除できていない、あるいはリンパ節転移の可能性があると考えられる。



# 胃がんの治療

## 薬物療法とは

- 胃がんにおいて、手術が行えない場合や、他の臓器への転移や再発がある場合には、がんの進行を抑えたり、症状を和らげたりする目的で薬物療法を行うことがあります。
- 薬物療法は一次治療から始め、効果が得られなくなったり、副作用により継続が困難になったりすると、別のお薬を用いた二次治療、三次治療が行われます。



一次  
治療

- 効果の減弱
- 副作用の発現  
など

二次  
治療

- 胃がんの薬物療法に用いられるお薬には、化学療法剤(抗がん剤)、免疫チェックポイント阻害薬、分子標的薬があります。これらを単独で使用したり、数種類を組み合わせ使用したりします。

## 薬物療法を選ぶときの主な指標①

- 薬物療法の選択においては、バイオマーカーを含めたがんの特徴と、患者さんの状態や希望を考慮します。

### 〈がんの特徴を判断する要素〉

- バイオマーカー(p.16参照)
- 他臓器への転移の有無、転移先
- 再発までの期間(再発の場合)

など

### 〈患者さんの状態や希望〉

- 年齢、全身状態(体力)
- 飲み薬の服用可否
- 腎臓、肝臓などの機能
- 患者さんの生活環境・希望

など

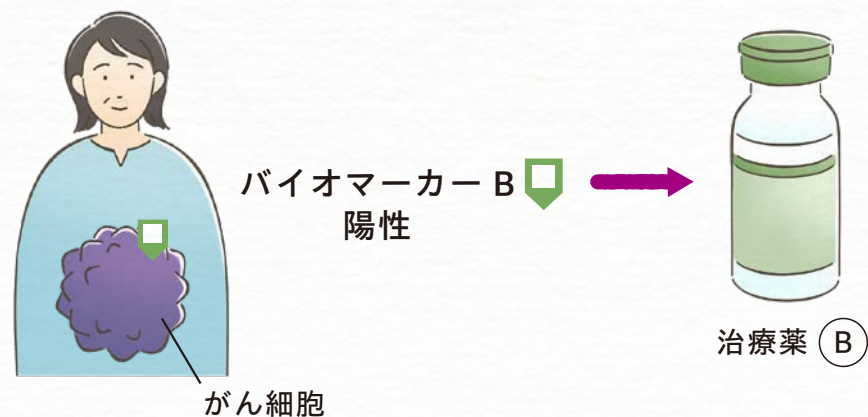


# 胃がんの治療

## 薬物療法を選ぶときの主な指標②

### バイオマーカーとは

- バイオマーカーとは、治療効果やお薬の選択、予後の予測などの指標となる体内の物質(遺伝子やタンパク質など)です。
- 同じ胃がんでも患者さんによってがんの特徴は異なります。そのため、胃がんに対する薬物療法を行う際には、いくつかのバイオマーカーについて検査し、その結果(陽性、陰性など)をもとに、お薬を選択します。



※バイオマーカーが発現していない(陰性の)場合もあります。



# 胃がんの治療

## 薬物療法を選ぶときの主な指標③

### 胃がんで用いられる主なバイオマーカー

- 胃がんで用いられる主なバイオマーカーには、HER2、CLDN18.2、CPS、MSIがあります。

#### HER2 (ハーツー)

細胞の増殖に関わる働きをもつタンパク質です。胃がんでは、正常細胞と比べてHER2が過剰に発現していることがあり (HER2陽性)、がんの異常な増殖に関与していると考えられます。HER2陽性の場合、HER2に結合し、働きを阻害するお薬が選択されます。

#### CLDN18.2 (クローディン18.2)

細胞同士を接着する働きをもち、通常は胃粘膜の細胞の間に存在するタンパク質です。一部の胃がんではCLDN18.2が発現していることがあり (CLDN18.2陽性)、この場合、CLDN18.2を目印としてがん細胞を攻撃する抗CLDN18.2抗体薬が選択されます。

#### CPS (シーピーエス)

ピーディーエルワン

PD-L1とよばれるタンパク質がどれだけ発現しているかを示すスコアです。がん細胞は、自身もつPD-L1を免疫細胞もつPD-1に結合させることで、免疫細胞からの攻撃を免れています。CPSが高い場合、PD-1とPD-L1の結合を防ぐ免疫チェックポイント阻害薬による治療が選択されます。

#### MSI (エムエスアイ)

「マイクロサテライト不安定性」の略で、高い場合 (MSI-High)、遺伝子の修復機能が低下していることを示します。この場合、CPSと同様に免疫チェックポイント阻害薬による治療が選択されます。

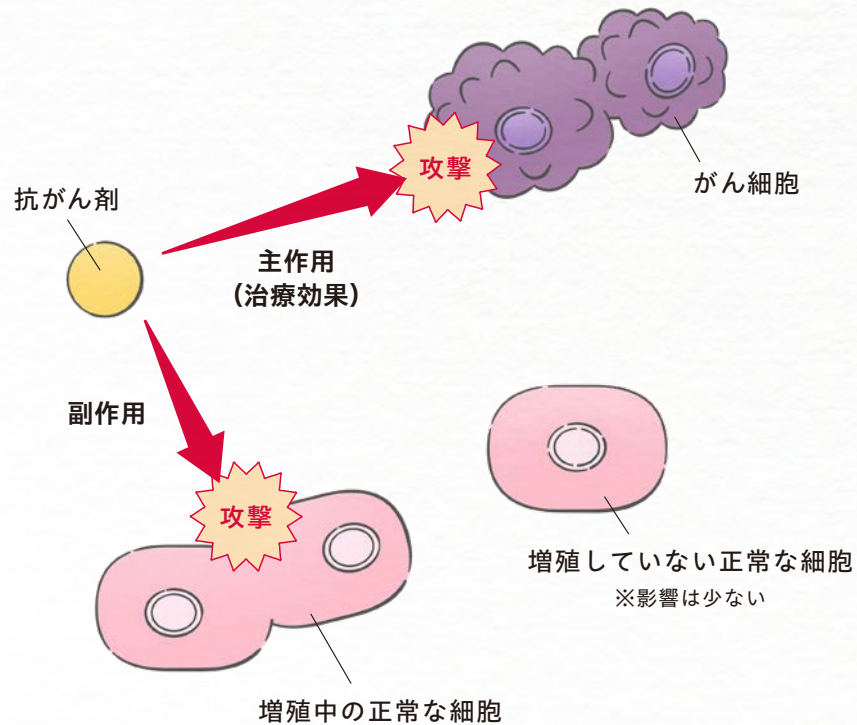


# 胃がんの治療

## 薬物療法に用いられるお薬の特徴と主な副作用①

### 化学療法剤(抗がん剤)

- 抗がん剤は細胞の増殖を抑制することで細胞を破壊するお薬です。異常な細胞増殖はがんの特徴であり、これを抑制することで、がん細胞を破壊します。
- 胃がんに使われる抗がん剤には、代謝拮抗薬やプラチナ製剤、微小管阻害薬などがあります。



### 抗がん剤の主な副作用

(あらわれやすい副作用はお薬によって異なります)

- 抗がん剤は正常細胞にも作用するため、副作用が生じます。一般的に、活発に細胞増殖を行っている消化管粘膜や毛根、骨髄(赤血球や白血球などを作り出す場所)などの細胞が影響を受けます。
- 特に注意が必要な副作用は担当医へ確認し、症状があらわれた場合には相談するようにしてください。

主な副作用	症状・対処法
吐き気(悪心)・おう吐	予防が重要なため、あらかじめ制吐薬を使用します。冷たい水や氷水でうがいをするのもよいでしょう。
貧血	めまいやだるさ、息切れなどがあらわれます。急な動作は避けるようにし、めまいがあるときは安静にしましょう。
手足のしびれ(末しょう神経障害)	手足のしびれ、違和感が生じます。症状があらわれたら担当医にご相談ください。靴下や手袋での保温を行い、冷たいものを触ったり飲んだりしないようにしましょう。
下痢	スポーツドリンクなどを飲み脱水を防ぎましょう。続く場合は担当医にご相談ください。
口内炎	予防のため、口の中を清潔に保ちましょう。口の乾燥を防ぐためにマスクをつけるのも効果的です。
脱毛	あらかじめ髪を短くしておくと、抜けた毛の掃除がしやすくなります。医療用のかつらや帽子などを上手に利用しましょう。
骨髄抑制*	感染症にかかりやすくなります。人ごみを避け、マスクの着用、こまめなうがい・手洗いを心がけましょう。

\* 自覚症状があらわれにくく、主に検査によってわかる副作用です。

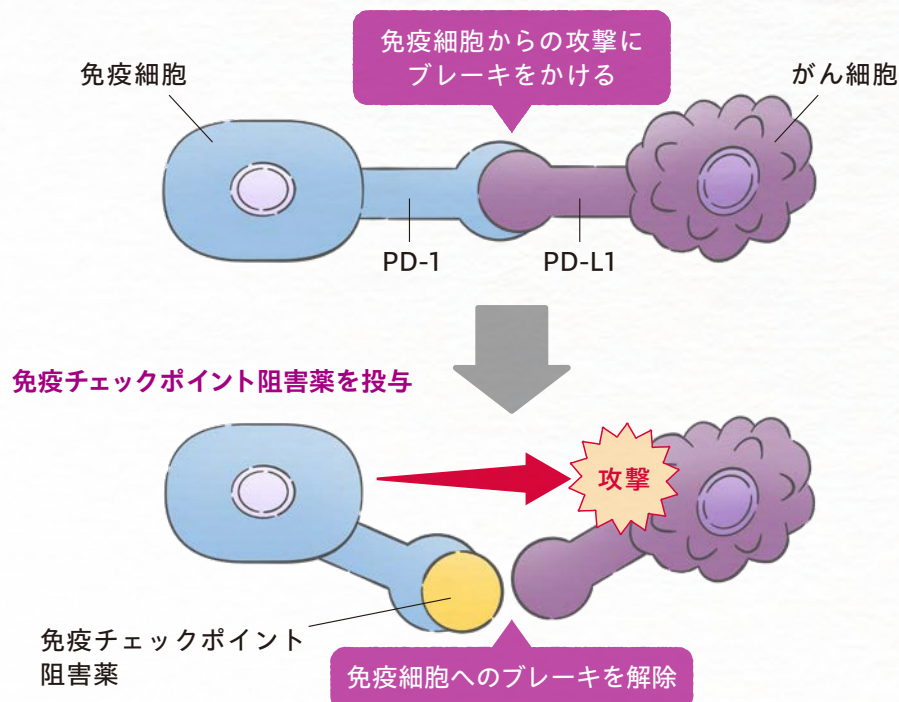


# 胃がんの治療

## 薬物療法に用いられるお薬の特徴と主な副作用②

### 免疫チェックポイント阻害薬

- 私たちの体がもともと持っている免疫の働きを利用したお薬です。がん細胞は、免疫細胞の攻撃から逃れる手段をもっています。免疫チェックポイント阻害薬はこの手段を妨害し、免疫細胞ががん細胞を攻撃できるようにします。
- 胃がんに使われる免疫チェックポイント阻害薬には、抗PD-1抗体薬があります。



### 免疫チェックポイント阻害薬の主な副作用

(あらわれやすい副作用はお薬によって異なります)

- 免疫チェックポイント阻害薬は免疫細胞を活性化させる作用をもちます。その結果、免疫細胞が働きすぎてしまい、体内の他の細胞が攻撃されてしまうことがあります。全身のあらゆる臓器に副作用が発現することが特徴です。
- 特に注意が必要な副作用は担当医へ確認し、症状があらわれた場合には相談するようにしてください。

主な副作用	症状・対処法
お薬の注入に伴う反応	投与から24時間以内に起こることがあります。投与中、投与後に体調の変化があったら、すぐに医療スタッフに教えてください。
下痢(腸炎)	大腸や小腸の炎症によって、腹痛やおう吐、下痢などが生じます。
息苦しさ(間質性肺疾患)	肺の炎症によって、息苦しさや、痰を伴わない咳などが生じます。
皮膚の赤み、水ぶくれなど(皮膚障害)	皮膚が赤くなったり、水ぶくれができたりします。唇や目などにも生じることがあります。
1型糖尿病*	血糖値の上昇によって、のどの渇きや吐き気などが生じます。
脳炎*	頭痛、めまいなどが生じ、意識が薄れることもあります。
肝臓・腎臓の機能低下(肝・腎障害)*	けんたいかん 倦怠感などが生じます。定期的に血液検査によって肝機能・腎機能を確認します。
血液の異常(血液障害)*	あざがでやすい、出血しやすい、息苦しいといった症状があらわれます。

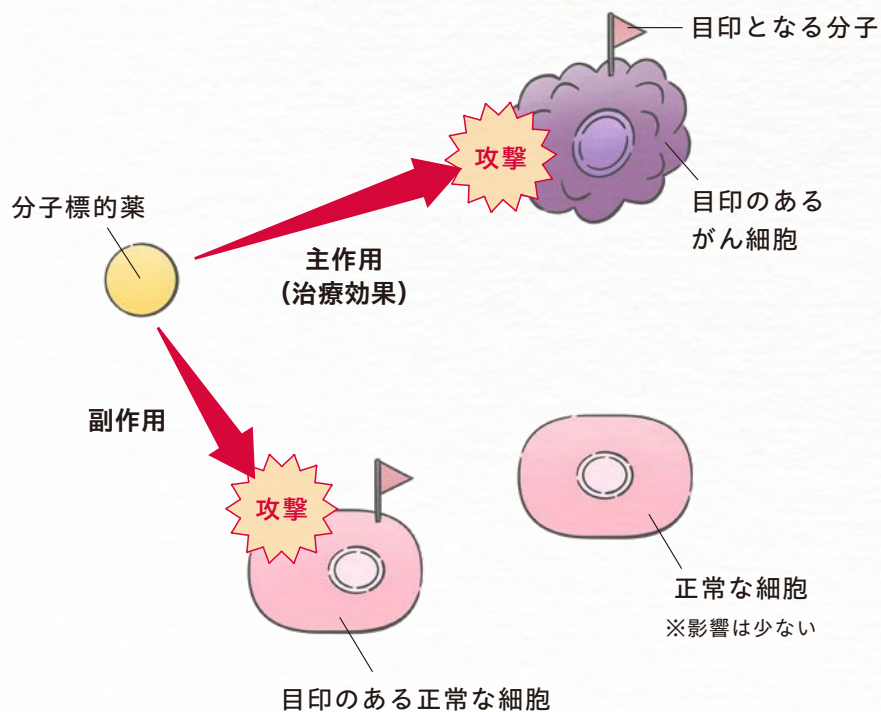
\* 自覚症状があらわれにくく、主に検査によってわかる副作用です。



## 薬物療法に用いられるお薬の特徴と主な副作用③

### 分子標的薬

- がん細胞に特徴的な分子を目印にして、がん細胞を攻撃するお薬です。
- 胃がんブイージーエフアールに用いられる分子標的薬には、HER2阻害薬、VEGFR2阻害薬、抗CLDN18.2抗体薬などがあります。



### 分子標的薬の主な副作用

(あらわれやすい副作用はお薬によって異なります)

- 分子標的薬は、がん細胞に特徴的な分子を目印にするため、正常な細胞に対する無差別な攻撃は生じにくいですが、目印とする分子をもつ場合は正常な細胞も攻撃対象となります。
- それぞれの分子標的薬が目印とする分子によって、異なる副作用がみられます。
- 特に注意が必要な副作用は担当医へ確認し、症状があらわれた場合には相談するようにしてください。

主な副作用	症状・対処法
お薬の注入に伴う反応	全ての分子標的薬で生じる可能性があります。投与から24時間以内に起こることがあります。投与中、投与後に体調の変化があったら、すぐに医療スタッフに教えてください。
吐き気(悪心)・おう吐	予防が重要なため、あらかじめ制吐薬を使用します。冷たい水、氷などで口内を冷やすのもよいでしょう。
心機能の低下*	息切れ、動悸などがあらわれます。担当医にご相談ください。
高血圧*	定期的に血圧の測定を行います。
タンパク尿*	定期的に尿タンパクの検査を行います。

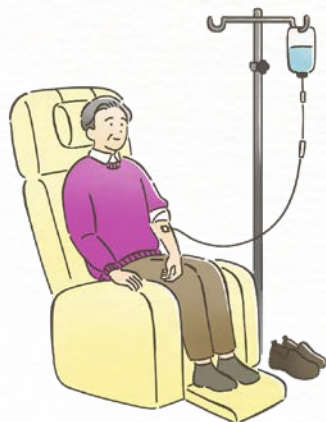
\* 自覚症状があらわれにくく、主に検査によってわかる副作用です。



# 治療中・治療後の生活

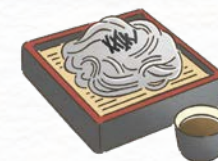
## 通院と検査

- 入院せず、外来で薬物療法を受ける際には、自宅で気をつけること、どのような症状が出るか、またその対処法を確認しておきましょう。緊急時の担当医への連絡先を控えておくことで安心です。
- 検査や診断の結果、自覚症状などの記録を残しておくことで、後から見返すことができ、担当医や看護師に相談する際に役立ちます。
- 治療中は、治療が有効か、副作用が発現していないかを調べる目的で、CT検査などの画像検査や血液検査を行います。検査結果のほか、症状の変化なども含め、現在の治療を継続すべきかを総合的に判断します。
- 検査などの結果、がんが大きくなってきていると判断された場合や、副作用が大きな負担になっている場合に、治療法の変更が検討されます。



## 食事

- がんの治療によって、食欲低下や味覚の変化、口内炎、吐き気などが生じ、普段通りに食事ができなくなることがあります。
- 治療薬を投与する前後など、タイミングによっても食べやすさに差があります。体調に合わせて食べられるものを食べるようにすることが大切です。あまり食べられないときも、水分をとることを忘れないようにしてください。
- 例えば食欲がないときは、少量ずつたくさんの品数を用意するとよいです。吐き気があるときは、刺激やにおいの強いものは避け、冷たいものやあっさりとしたものを食べてみましょう。
- 体調に応じた工夫について、担当医や看護師、栄養士にご相談ください。



## 生活

- 起床・食事・就寝の時間など、規則正しい生活を心がけましょう。
- 運動の許可が出たら、無理のない範囲で体を動かしましょう。簡単な家事や階段の上り下りなど軽い動きから始めましょう。
- 体調が悪いときには無理せず休むことが大切です。



# 治療中・治療後の生活

## 治療中の仕事について

- 職場によっては、休暇・時短勤務の制度や、産業医などの相談先があります。退職などの大きな決断は、状態が落ち着くまで、できるだけ避け、上司や人事・総務などの担当者に相談してみましょう。
- 治療の副作用による仕事への影響は、仕事内容や副作用の程度によって異なります。様子をみながら、休憩場所の確保や会議日時の工夫など調整をしていきましょう。



## 再発したときの治療

- 再発とは、手術によってがんを切除した後に、どこかに潜んでいたがんが検査で見つけられるほど大きくなったり、薬物療法などで小さくなったがんが再び大きくなったりすることをいいます。また、同じがんが別の場所に出現することもあります。
- 再発した場合、見つかった場所以外にもがんが潜んでいる可能性があります。そのため、まずは全身の広い範囲に効果が期待できる薬物療法が行われます。

## ご家族の方へのお願い

- 診断や治療の説明を受ける際に同席すると、状況の共有ができ、患者さんご本人が言いづらいことなどのサポートもできます。
- 病気のことを誰にどこまで話すかを、あらかじめ家族内で話し合っておくとい良いでしょう。
- 治療の際は、副作用によって生じる症状やご家庭で気をつけること、受診の必要がある場面などを把握しておきましょう。
- がんの症状や副作用は、見た目ではわからない部分もあります。一方で、極端に気を使われることを望まない方も多いです。ご本人の気持ちを想像してみるとともに、こまめにコミュニケーションをとりましょう。
- ご家族の方も不安やつらさを感じるのは当然のことです。がん相談支援センターなどにご家族の思いや悩みを相談できます。ご本人を支えられるよう、ご自身のこともいたわるようにしてください。





# 胃がんや治療についての相談

## 心の専門家

- がんと診断されたときや治療中は、落ち込んだり不安になったりすることがあります。家族や親しい友人にも相談できないときや、不安が長く続く場合には専門家に相談してみましょう。
- 心のケアは、病院によって仕組みが異なりますが、心療内科医、精神腫瘍医、心理士、専門の看護師などが担当となります。

## 高額療養費制度について

- 入院や通院、治療薬など、治療の際には都度費用がかかり、積み重なれば大きな負担となります。高額療養費制度は、あらかじめ決められた1ヵ月の上限額を超えて治療費を負担した場合、超過分について払い戻しが受けられる制度です。
- 詳しくは、下記の厚生労働省のウェブサイトをご覧ください。がん相談支援センターや病院の窓口にご相談ください。

厚生労働省ウェブサイト



## がん情報サービス

- がん情報サービスは、国立がん研究センターが運営する、患者さんやご家族向けのウェブサイトです。
- がんに関連する様々な情報を取り扱っており、がんや治療に関する用語集、冊子などを閲覧できます。
- また、患者さんやご家族の相談を受け付けているほか、「がん相談支援センター」の案内も行っています。
- がん相談支援センターは、患者さんやご家族など誰でも無料で利用できる相談窓口です。全国のがん診療連携拠点病院を中心に設置されており、対面や電話での相談が可能です。

がん情報サービスウェブサイト



がん情報サービスサポートセンター  
がん電話相談

平日10時～15時（土日祝日、年末年始を除く）

**0570-02-3410**（ナビダイヤル）

**03-6706-7797**

※相談は無料ですが、通話料は発信者の負担になります。